

砲台跡

大島の隠されていた観測所と軍の砲台は、北九州一帯の海岸に設けられた一連の軍事施設の 1 つです。これらの施設が初めて設置されたのは明治時代（1868～1912 年）であり、ロシア艦隊や中国艦隊が行う可能性のある攻撃から海岸線を守るためのものでした。その多くは、日露戦争（1904～1905 年）で日本が勝利した後に撤去されました。一部の軍事施設は、日本軍が満州に駐屯した 1930 年代に再び強化されました。

大島の砲台は、1936 年に完成しました。この砲台はコンクリート製の砲座 4 基、隠されていた観測所、弾薬庫およびサーチライトの格納庫から構成されていました。第二次世界大戦中には、射程距離が約 20km ある大砲 4 基など、重火器が設置されました。大島にはもう大砲はありませんが、ここを訪れば、大砲が据えつけられていたコンクリート製の円形の穴の周囲を歩くことができます。

観測所はコンクリート製のシンプルな壕で、人工の丘に隠されており、海が見えるようになっています。この観測所は、敵艦の距離と速度を計算するのに使われていました。観測所には歩いて入れます。晴れた日には、沖ノ島を見ることができます。沖ノ島は聖なる島であり、古くから信仰の対象となってきました。

日本とロシアは、満州および朝鮮半島の利権をめぐる戦った日露戦争時に、沖ノ島の沖で海戦を行いました。日本海海戦は、1905 年 5 月 27 日に、東郷平八郎（1848～1934 年）海軍大將が指揮する日本軍により、対馬海峡で戦われました。日本海軍は、ロシア艦隊の 2/3 を破壊しました。戦死したロシア水兵の一部は、大島に運ばれて埋葬されました。2013 年には、亡くなった両軍の人々の慰霊碑が、砲台跡の近くに建立されました。毎年、両国からの参加者がこの地を訪れ、慰霊祭を行います。

対馬海峡は、聖なる島である沖ノ島の近くにあります。沖ノ島の沖津宮にいた神職は、日本海海戦を目撃し、それを日誌に記録しました。沖津宮は、合わせて宗像大社と呼ばれる三宮の 1 つです。日露戦争

後、東郷平八郎大將は、勝利を記念して、旗艦 三笠の羅針盤を宗像大社に寄贈しました。宗像大社
辺津宮の境内にある神宝館を訪れると、この羅針盤を見ることができます。